



## 説教要旨 「イエス様の涙」

ルカによる福音書 19章37～44節

イエス様の時代のユダヤでは、ローマからの独立をめざしたメシア運動が幾度も発生し、それがローマの厳しい弾圧を招き、悲惨な結果をもたらしていました。弟子たちはイエス様のエルサレム入城に際して大きな歓声をあげますが、それがローマ当局の目に留まり、ローマの介入を招くことになれば大変な事態になります。ファリサイ派の人たちは、必要以上にローマに介入されることを恐れて、歓声をあげることを止めるように忠告したのです。

イエス様の生きられた時代から40年ほどたってからの話ですが、ユダヤ人の独立をめざしたユダヤ戦争が勃発。この際、ローマ軍はエルサレム神殿を徹底的に破壊しました。

イエス様は、滅びへと歩んでいるエルサレムの都を、そこに建つ神殿を見て、涙を流されました。ご自分のことを拒むために滅びから逃れ得ないこの神殿を、あざ笑うのではなく、涙を流されたのです。それはご自分の十字架上での死と復活を持ってしても、その滅びがもはやくい止めようのないことだにご存じだったからです。イエス様はその滅びへの道を歩んでいる神殿を、「どうせ滅びるのだから」と放っておいたわけではありません。神殿で商売をし、神を食い物としている人々を追い出し、毎日、境内で教えを説かれるのです。滅びへの道を突き進むエルサレムをひき止めることが出来ないとすべて承知の上で。イエス様の涙、それはご自分の死を持ってしても止めようのないエルサレムの滅びを目の当たりにして、ご自分の無力さを思い流された涙なのではないでしょうか。

このイエス様の姿を見せつけられた今、私たちは自らを恥じるほかありません。確かに、私たちにはどうしようもないことばかりがこの世界にはあふれています。私たちがどうこうしたところで、何も変わらないように思えます。しかし、このイエス様の涙を前にして、「仕方がない」と言って、そこで諦めてしまうことができるでしょうか。

イエス様が流されたこの涙を見つめつつ、平和の道を求めて共に歩いて参りましょう。

(2020・7・5 説教者：稲垣真実)